

第 418 回  
日 本 泌 尿 器 科 学 会 新 潟 地 方 会  
《 プログラム・抄録 》

日 時：令和 8 年 9 月 5 日（土）14 時 00 分  
会 場：パストラル長岡 5 階 末広の間  
長岡市今朝白 2 丁目 7 番 25 号  
TEL：0258-35-1305

次回 第 419 回 新潟地方会 予告  
日時：令和 8 年 12 月 12 日（土）午後 2 時  
会場：未定  
演題申込期限：令和 8 年 11 月 20 日（金曜日）

※すべて PC のみの発表とさせていただきます  
※一般口演時間は、7 分、討論 3 分（時間厳守）

日本泌尿器科学会会員証を必ずご持参下さい

〒951-8510 新潟市中央区旭町通 1-757  
新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野(泌尿器科学教室)内  
日本泌尿器科学会新潟地方会  
TEL：025（227）2289／FAX：025（227）0784  
会長 大澤 崇宏

14:00~14:10

開会の辞

日本泌尿器科学会新潟地方会会長

大澤 崇宏

14:10~15:10

座長 村田 雅樹

1. 進行尿路上皮癌に対し Enfortumab Vedotin + Pembrolizumab 療法が著効し、腫瘍崩壊症候群を来した 1 例

長岡赤十字病院 泌尿器科

今井俊介、風間明、鈴木一也、米山健志

症例は 72 歳男性。肉眼的血尿を自覚し、膀胱癌疑いで当院へ紹介された。初診時 CT では膀胱後壁に浸潤を伴う広範な隆起性病変に加え、多発リンパ節転移を認めた。膀胱癌 cT3bN3M1a の診断で、Enfortumab Vedotin + Pembrolizumab 療法(EVP 療法)を開始した。治療開始後に高 LDH 血症および急性腎障害を認め、腫瘍崩壊症候群(TLS)の疑いで入院した。入院時 CT では膀胱病変、リンパ節転移は著明に縮小していた。入院後、支持療法で腎機能は改善した。3 ヶ月後の CT でも病変は縮小を維持していた。EVP 療法後に TLS を生じた著効例を経験したので文献的考察をふまえて報告する。

2. 蛍光ナビゲーションによるリアルタイム尿管可視化の有用性

厚生連長岡中央総合病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、産婦人科<sup>2)</sup>、外科<sup>3)</sup>

山田瑞歩<sup>1)</sup>、村下竜一<sup>1)</sup>、石田恭平<sup>1)</sup>、丸山亮<sup>1)</sup>、照沼正博<sup>1)</sup>、古俣大<sup>2)</sup>、西村淳<sup>3)</sup>

大腸癌や子宮および付属器の手術ではしばしば尿管の同定が困難であり、尿管損傷を回避する手段として尿管カテーテル留置が選択されてきた。従来の予防的尿管カテーテル留置は触覚的識別を補助するが、鏡視下手術では限界がある。近年、蛍光尿管ステントや ICG の尿路注入といった蛍光ナビゲーションが尿管損傷回避に寄与すると報告されている。今回当院で施行した複数症例の経験からその有用性を検討した。

3. 褐色細胞腫の開腹術後再発に対して腹腔鏡下摘除術を施行した 1 例

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科

河野利輝、鳥羽智貴、星野華奈、池田正博、安楽力、石崎文雄、田崎正行、星井達彦、大澤崇宏

35 歳男性。9 歳時に褐色細胞腫・パラガングリオーマに対し両側副腎部分切除および腫瘍摘出術を施行された。35 歳時に右副腎腫瘍を指摘され、画像・内分泌検査より再発と診断した。開腹術後再発症例であり、肝下面・大網の高度癒着に加え腫瘍は下大静脈と癒着していたが、慎重な剥離操作により腹腔鏡下右副腎摘除術を完遂した。病理は褐色細胞腫で、VHL 遺伝子変異を認めた。再発病変に対する腹腔鏡下再手術の報告は少ないが、適切な症例選択と慎重な剥離操作により安全かつ低侵襲に施行可能と考えられた。文献的考察を加えて報告する。

4. 膀胱横紋筋肉腫との鑑別に 2 度の生検を行い、炎症性偽腫瘍と診断した 1 例

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科

阿部壮一郎、星野さや香、小原健司、勝見恒太、西山紘貴、鳥羽智貴、石崎文雄、星井達彦、大澤崇宏

症例は 6 歳女児。尿閉を主訴に前医を受診した。腹部超音波検査と MRI 検査で膀胱頸部に腫瘍を認めため精査目的に当科紹介となった。横紋筋肉腫を疑い経尿道的、経腔的に 2 回組織を採取したが、いずれも悪性所見を認めなかった。再検した MRI 検査で腫瘍の縮小を認めたため、炎症性偽腫瘍と診断し無治療経過観察とした。現在症状は改善し、腫瘍も自然退縮している。小児の膀胱原発腫瘍として横紋筋肉腫や炎症性筋線維芽細胞腫などとの鑑別を要し、その組織生検と診断に難渋した。本症例について過去の文献的考察を交え報告する。

## 5. 同一症例の10年で3回の自慰行為に伴う膀胱・尿道異物摘出術の経験

新潟大学地域医療教育センター 魚沼基幹病院 泌尿器科  
坪谷啓汰、渡邊和博、星井達彦、原昇、西山勉

70歳台男性で、10年前、長さ20cm、太さ8mmのゴムチューブ内に金属が入っているものを尿道に入れて楽しんでいたところ、全部膀胱に入り、ER受診した。同日緊急に経尿道的膀胱異物摘除術を行った。6年前、尿道に6cm長の棒状金属をいれて遊んでいたところ、膀胱に入ってしまった、同日緊急に経尿道的膀胱異物摘除術を行った。2026年6月に20cmの鎖を尿道に入れて遊んでいたら取れなくなり、ER受診した。鎖状の金属が尿道に入り込んでおり、尿道内に固定された状態となっていた。緊急で尿道腹側の瘻孔を切開し広げ、鎖を摘出した。自慰行為に伴う膀胱・尿道異物はまれな疾患ではないが、同一症例で複数回の膀胱・尿道異物摘出術を経験することは非常にまれと思われ、文献的考察を加えて報告する。

## 6. 悪性腫瘍との鑑別に難渋した非特異性肉芽腫性前立腺炎の一例

柏崎総合医療センター泌尿器科<sup>1)</sup>、長岡中央総合病院病理診断科<sup>2)</sup>、新潟大学医歯学総合病院泌尿器科<sup>3)</sup>  
柳佳輝<sup>1)</sup>、羽入修吾<sup>1)</sup>、五十嵐俊彦<sup>2)</sup>、西山紘貴<sup>3)</sup>

症例は60歳男性、頻尿、血尿で受診、PSA0.9、PV25ml、直腸診にて前立腺全体が硬結、PSA陰性前立腺癌が疑われ、前立腺生検、TURPによるHot生検が行われた。術後5日目に尿閉を起こし、TURPを再度行い、病理結果にて非特異性肉芽腫性前立腺炎と診断された。稀有な症例につき、既報を交えて検討する。

## 《休 憩 15:10~15:30》

15:30~16:30

座長 丸山 亮

## 7. AUA annual meeting への参加報告

新潟県立中央病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、新潟大学大学院 医歯保健学研究科 腎泌尿器病態学分野<sup>2)</sup>  
保坂仁哉<sup>1)</sup>、石崎文雄<sup>2)</sup>、大澤崇宏<sup>2)</sup>

2026年5月13日から18日にかけて、米国ワシントンD.C.にて開催されたAUA annual meetingに参加した。世界各国から最新の臨床知見や基礎研究が集結する非常に有意義な国際学会であった。現地参加の雰囲気や盛況ぶりの報告に加え、抄録集から抽出した最新のトピックおよび興味深い研究成果を数例厳選し報告する。

## 8. 前立腺癌放射線治療後局所再発に対しサルベージHIFUを施行した1例

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科、東海大学医学部付属病院 泌尿器科<sup>2)</sup>  
勝見恒太<sup>1)</sup>、石崎文雄<sup>1)</sup>、阿部壮一郎<sup>1)</sup>、西山紘貴<sup>1)</sup>、星野さや香<sup>1)</sup>、鳥羽智貴<sup>1)</sup>、星井達彦<sup>1)</sup>、小原健司<sup>1)</sup>、西川大智<sup>2)</sup>、高橋薫平<sup>2)</sup>、小路直<sup>2)</sup>、大澤崇宏<sup>1)</sup>

【症例】57歳男性。【経過】前立腺癌（PSA 4.9 ng/mL、GS 4+5）に対しIMRT施行後、生化学的再発を認めADTを開始したがPSA再上昇を認めた。PSMA-PETで前立腺内限局再発と診断し、サルベージHIFUを施行した。術後PSAは0.01 ng/mL未満となりADTを中止し、術後1年6か月現在、再発なく経過している。【考察】サルベージHIFUは、尿路機能および直腸機能の温存が期待できる低侵襲な局所治療として注目されている。PSMA-PETによる正確な局在診断は、放射線治療後局所再発に対するサルベージHIFUの適切な患者選択に有用と考えられた。

## 9. 術後 46 年目の再発を認めた褐色細胞腫の一例

新潟大学大学院医歯学総合研究科 腎泌尿器病態学分野<sup>1)</sup>、分子・診断病理学分野<sup>2)</sup>

西山紘貴<sup>1)</sup>、石崎文雄<sup>1)</sup>、谷優佑<sup>2)</sup>、杉野英明<sup>2)</sup>、安楽力<sup>1)</sup>、池田正博<sup>1)</sup>、田崎正行<sup>1)</sup>、齋藤和英<sup>1)</sup>、大澤崇宏<sup>1)</sup>

71 歳女性。25 歳時に褐色細胞腫で左副腎摘除術を受けたが、その後経過観察は中断。虚血性腸炎の精査 CT で多発溶骨性病変を指摘され、椎体生検中に著明な血圧上昇を認めた。病理所見と尿中・血中カテコラミン高値、MIBG シンチおよび PET-CT の集積から、術後 46 年目の多発骨転移再発と診断した。全身療法は行わずドキサゾシン内服下に経過観察し、6 年間明らかな進行を認めない。PPGL は長期無再発例でも再発の可能性があり、生涯にわたる経過観察が重要である。

## 10. RARP 後の局所進行膀胱癌に対して EV-P 療法後に RARC を施行した 1 例

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科

有波健太郎、田崎正行、安楽力、石崎文雄、池田正博、石川晶子、渡邊和博、池田多朗、河野利輝、大澤崇宏

68 歳男性。RARP の既往あり。肉眼的血尿を認め、画像検査及び TURBT を施行、筋層浸潤性膀胱癌 (cT3 以上 N0M0) と診断となった。根治切除困難と判断し EV-P 療法 6 コース施行、腫瘍縮小後に conversion surgery として RARC を施行した。手術時間 7 時間 44 分、出血量 40 mL、術中合併症は認めなかった。RARP 後症例では解剖学的位置の乖離に注意を要する。安全な膀胱全摘のための工夫を手術動画として提示する。

## 11. 先天性陰茎屈曲に対する当院での治療成績

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科

星野さや香、小原健司、星井達彦、大澤崇宏

先天性陰茎屈曲とは、外尿道口の位置異常は伴わないが、勃起時の陰茎の屈曲を認める尿道下裂類縁疾患である。屈曲の程度と、屈曲を引き起こしている原因によって術式が異なる。2019 年から当院で手術を施行した 12 例を対象とし後方視的に解析した。初回手術として尿道離断を含む二期の手術を 1 例で行った。2 例で初回手術後の屈曲の再燃により再手術が必要となり、その内 1 例で尿道離断を行った。先天性陰茎屈曲では、術中の artificial erection test を含めた十分な屈曲の評価による術式選択が再燃防止に重要である。

## 12. 市中病院における梅毒症例の動向と対応

医療福祉法人愛仁会亀田第一病院

泌尿器科<sup>1)</sup>、産婦人科<sup>2)</sup>、皮膚科<sup>3)</sup>、ICT<sup>4)</sup>、検査科<sup>5)</sup>

ビリーム ウラジミル<sup>1)</sup>、小柴彩<sup>1)</sup>、新井繁<sup>2)</sup>、渡辺信也<sup>2)</sup>、橋本和佳子<sup>3)</sup>、田中慎二郎<sup>4)</sup>、伊藤愛貴<sup>5)</sup>

近年、梅毒の患者数の増加とともに多様な臨床像を呈する症例が報告されているなか、病床 200 未満である当院の実情から検討した。検査科で梅毒検査 (RPR、TPHA) 陽性、医事課で梅毒の診断、ICT の情報と保健所に届出された患者をまとめた。2024 年 1 月から 2025 年 12 月まで当院で梅毒と診断された患者は 16 名 (2024 年は 7 名、2025 年は 9 名)、年齢は 28.2~95.6 歳、平均 70.5 歳、女性 10 名、男性 7 名 (泌尿器科 1 名、内科 2 名、産婦人科 3 名、整形・脊椎外科 10 名)。63.9 歳~95.6 歳のプレシニア~高齢患者 10 名は、晩期梅毒と診断し、感染力が低いと判断し、精査、フォロー、抗生剤治療を行わず、その他の 5 名は皮膚科、泌尿器科および産婦人科で治療した。39 歳の 1 名は Drop out され、精査、治療を受けていない。なお、2 年間の院内検査で擬陽性、院内陽性、外注で陰性が 4 名認められた。限られた人的資源の中で、迅速な血清学的検査、他科との協働、地域医療機関との情報共有が重要と思われる。小規模施設における実践的対応のあり方について報告する。

地方会終了後、17:00 よりサテライトセミナーが予定されています。